

# 養 蚕 ②

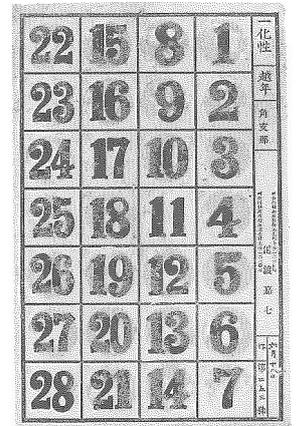
## 4. 養蚕の時期

市域の養蚕は、春蚕はるご・夏蚕なつご〔ナツゴ・ナツサン〕・秋蚕あきご〔アキゴ・シュウサン・シヨシュウ〕・晩秋蚕ばんしゅうさんの年3、4回行われていました。春蚕は5月5日の節供のころが掃き立てで、6月10日ごろに上簇じょうぞくしました。夏蚕の時期は7月中でしたが、行う家は少数でした。秋蚕は8月1日ごろに掃き立てで、20日ごろに上簇しました。晩秋蚕は8月末ごろに掃き立てを行いました。

## 5. 養蚕の方法

### ① 蚕種の購入

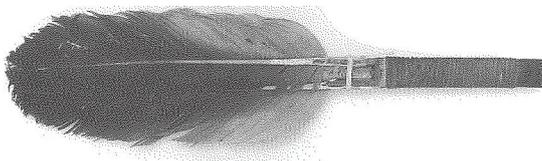
カイコの卵を蚕種さんしゅ〔タネ・コタネ〕といい、蚕種紙さんしゅし〔コタネガミ〕という紙に産みつけられたものを蚕種業者〔タネヤ〕から購入していました。



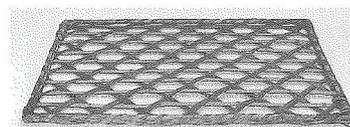
コタネガミ

### ② 掃き立て

孵化ふかしたばかりの幼虫である毛蚕けごを、蚕種紙からエビラの上に敷かれた蚕座紙さんざしの上に、鳥の羽根〔ハキタテハケ〕を使って移しました。この作業を掃き立てといいます。エビラを蚕棚〔タテジ・テンノウサ〕に載せてカイコを飼育しました。



ハキタテハケ



エビラ



テンノウサ

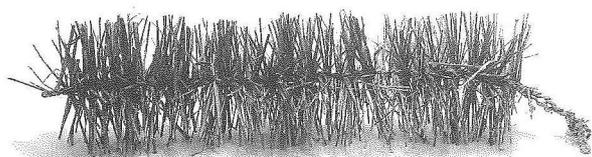
### ③ 給桑と掃除

カイコに桑の葉を与えることを給桑きゅうそうといいます。朝露がついていない葉を使用するために、早朝に摘み取りに出かけたといいます。多いときには1日10回ほど給桑するので、寝る暇もなかったといいます。

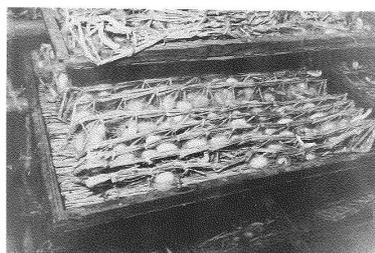
また食べ残しや糞ふん〔コシリ〕、脱皮した後の皮の掃除〔コシリヌキ〕も同時に行いました。

### ④ 上蔭

カイコが熟蚕じゅくさんになり糸を吐くようになると、蔭まぶしに移して繭まゆを作らせました。この作業を上蔭じょうぞくといいます。初期は藁製のハガチマブシを使用していましたが、繭を傷つけることが多く、これを改良して改良蔭けいりょうまぶしが作られました。第2次世界大戦後になると、木枠に紙の枠を組み合わせた回転蔭かいてんまぶしが開発されました。



ハガチマブシ



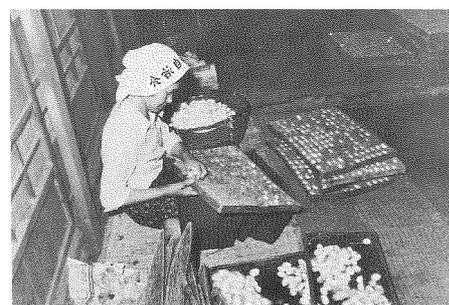
改良蔭



回転蔭

### ⑤ 収繭と毛羽取り

カイコは、繭を作り1週間ほど経つとさなぎになります。そのころに蔭から繭を抜き取る収繭しゅうけん〔マユカキ〕を行いました。繭の表面には毛羽けばがついているので毛羽取りを行いました。



マユカキ

### ⑥ 出荷

市域の北部では、農閑期に繭を生糸きいとに加工して町田の市や厚木の製糸工場に出荷していましたが、南部では繭のままで製糸工場に出していたといいます。またソクザシと呼ばれる繭の仲買人に売っていたともいいます。